

光明寺くわうみやうじ

〔京極通条違橋の南にあり、浄土宗百万遍に属す〕本尊抱止如来〔弥陀寺慈覚じかくの作、立像三尺余。宇津宮入道蓮生れんしやう夢中に抱止しといふ。又西山三鈷寺にもあり〕

阿弥陀寺あみだじ

〔同街光明寺の南に隣る、浄土宗百万遍に属す〕本尊阿弥陀仏〔弘法の作、坐像六尺許、四十八願巡の第十六番なり。開基は清玉上人せいぎよく〕織田信長おだのぶなが同信忠のぶたけ両公影のぶたけりやうこうのえい〔方丈に安置す、共に衣冠帯剣持笏の像あり〕同両公墓■に戦死臣数輩墓〔当寺にあり、清玉上人両公の帰依を受るゆへにこゝに葬るなり。当寺初は上京大宮の東にあり、天正年中此地にうつす〕

十念寺じふねんじ

〔同街今出川の北にあり、浄土宗西山派永観堂に属す。開基は真阿上人、足利義教よしのり公帰依し給ふ、永享十二年七月二日寂す、遺言によつて鳥羽川に水葬す、六十六才〕

本尊阿弥陀仏〔弘法大師の作、坐像八尺五寸、古は東山雲居寺の本尊にして撰取如来と称す〕

仏鬼軍図〔二休和尚の筆なり、仏地獄を破つて無比の楽城とし給ふ図なり、当寺什宝とす〕

足利將軍諸士念仏講名帳あしかがしやうぐん〔当寺にあり〕

口にとなへ卒都婆にかきて弥陀はみづ書ずとなへぬ弥陀を教よ 足利義教

返 し

何と吹風とはさらにしらねども哀もよほす秋のくれかな 真阿上人

仏陀寺ぶつだじ

〔同街今出川の北にあり。帝王系図云、天曆六年二月四日朱雀太上皇仏陀寺に於て落飾し給ふ云云。後土御

門院の時、住主邦諫上人御戒師となる〕

本尊阿弥陀仏 〔恵心の作、坐像八尺五寸、当寺再興の時、後柏原院口宣を賜ふ〕

京極八幡宮きやうごくはちまんぐう

〔上御霊門前西二町にあり、古へは京極三条にありて寺を京極寺と号し、社頭魏々として祭式も亦嚴

重たり。伝云、武蔵坊辨慶壯年の時、此寺に棲で力を石にて様見る、其石今誓願寺の庭にあり、三条京極の西を辨慶石町といふ、是京極寺の旧地なり。盛衰記云、京極寺は日吉の末社なりと云云。応仁の乱後こゝに遷すといふ、今に京極寺と号す、寺記紛失す〕

〔中右記云、寛治八年八月八日申時許大学寮に馳参ず。かの寮の東の門南の辺に神輿を昇立て、田楽、獅子、鼓、笛、誼くして雑人市をなす、大に驚てこれを問へば今日は京極寺の祭なり、此門前に於て先例の如く神輿迎をする所なりと

今昔物語曰 高陽親王かやのみこと申人おはしけり、これは桓武帝くわんむていの皇子なり。極たる上手の細工にてなんありける。京極寺といふ寺あり、それは此親王の建給へるなり。其寺の前の河原にある田は此寺の領なりけり。然るに天下早魃しける年、万の所みな焼失ぬと■る、増て此田は加茂川の水を入れて作れる田なれば、其川も水絶にければ、苗もみな赤みぬべし。然るに高陽親王かやのみこ、長四尺許なる童の左右の手に器を捧て立る形を作りて此田の中に立、其持たる器に水を入れ、盛受ては則類に流しける掛る構を造たりければ、此を見る人水を汲で此器に入れるれば、盛受ては類に流しかけくすれば、これを興じて聞継つ、京中の入市をなして集り、水を器に入れて見興じ■る。かくの如く為る間其水田に満て露焼ずしてなん止にける。いみじき才覚ならんと世の人賞しける。

羽休山飛行院うきゅうざん ひぎやうあん

〔柳原室町の西にあり、古へは堂舎魏々たり、応仁の後荒廢して今小堂存す〕

本尊將軍地蔵

〔役行者えんのぎやうじやの作、立像二尺余。愛宕山あたごの開基慶俊和尚けいしゆん、天狗太郎坊てんぐが示現によつて木槿の叢より感得す、

故に木槿地蔵とも云又毯とも書す〕慶俊和尚像けいしゆんおしやう〔坐像三尺余〕太郎坊像たらうぼうの〔坐像一尺余、共に堂内に安ず〕